

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：54501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2016

課題番号：23720129

研究課題名(和文) 近世初期における日本漢詩文の書写・集成事業に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Basic Research on the Copying and Compilation of Japanese Kanshi Materials in the Initial Decades of the Early Modern Period

研究代表者

仁木 夏実 (NIKI, Natsumi)

明石工業高等専門学校・その他部局等・准教授

研究者番号：40367925

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、近世初期における大名家・禁裏および儒者らによる、中古・中世の日本漢詩文の書写や集成、そしてそれらの成果を支えた校訂事業などの研究に着目したものである。その全容の解明とその対象となった中古・中世漢詩文への新たな視角の獲得を目指し、その成果として、鎌倉時代の儒者藤原俊国の事績を整理したほか、彰考館旧蔵「詩集」所収資料と内閣文庫蔵「十番詩合」について文学史上における位置づけの検討、学界への紹介を行った。

研究成果の概要(英文)：This research project deals with the copying and compilation of ancient and medieval Japanese poetry in Chinese materials by members of daimyo, Imperial court and Confucian scholarly circles in the initial decades of the early modern period. It also focuses on research on revisions etc. undertaken with the support of these achievements. With the aim of achieving a fresh perspective on clarifying the overall picture of the field, along with the ancient and medieval kanshi materials which form its object, this study's findings organize the achievements of the Kamakura-period [1185-1333] Confucian scholar Fujiwara no Toshikuni; as well as this, this study examines the positioning in literary history of the materials included in the Shishu [anthology of poetry], formerly in the archives of the Shokokan historical research institute, and the Jyuban Shiawase [anthology of poetry], stored in the Cabinet Library of the National Archives of Japan, introducing these materials to the world.

研究分野：和漢比較文学

キーワード：内閣文庫 詩合

1. 研究開始当初の背景

慶長(1596~1615)から元禄(1688~1704)にかけての近世初期は、水戸徳川家をはじめとする大名家や霊元天皇周辺を中心とする禁裏、また林家ら儒者など様々な人々によって、古典籍に大きな整理の手の及んだ時代であった。『本朝通鑑』『大日本史』等の大型編纂物が編まれ、尊経閣文庫(加賀前田家)・彰考館(水戸徳川家)・高松宮本等、現在に至るまで歴史学及び文学研究に欠くことのできない書籍の収集が行われたのはまさにこの時期のことである。

多彩なその成果の中には、日本漢詩文に関するものも数多く含まれている。『本朝通鑑』(寛文10年(1670)成立)には平安時代に活躍した儒者らの詩話が豊富に取り入れられており、林家儒者たちの興味の在り所について物語るものとなっているし、水戸の史館彰考館の館員たちは、藩主徳川光圀の指揮のもと、京都の公家や寺院の蔵書を博搜して本朝漢文の総集『本朝文集』(延宝7年(1679)成立)と、同じく漢詩の総集「(本朝)詩集」(延宝9年(1681)成立)を編み、一応の完成を見た後も増補を繰り返している。また、『本朝文粹』(寛永6年(1629)版)や『菅家文草』(寛文7年(1667)版)等が版行されたことも、この時期の日本漢詩文研究の状況の一端をよく伝えるものであろう。

従来、個々の作品論が中心であった現代の和漢比較文学研究において、それらを同時期に行われた調査研究の成果として全体的に捉える視点は必ずしも一般的なものとは言えない。そのため、今日にいたっても、それらの利用の在り方はあくまでも平安時代や鎌倉時代の古写本のテキストを補う存在、テキストクリティークの素材の一つとしてということがほとんどであり、それ自体が研究対象とされることは極めて稀である。

しかし、吉岡眞之氏らによる高松宮家伝来禁裏本の調査研究(その成果の一つが、『禁裏本と古典学』塙書房・2009年)をはじめ、近世期における古典研究についての近年の研究の深化には目覚ましいものがある。現在は歴史史料や和歌関係の史料についての報告が主であるが、漢詩文の史料についても同様の調査の目が向けられるべき時期となったと言えるのではないかと。

研究代表者は、2005年に日本学術振興会特別研究員に採用されて以来、平安時代後期から鎌倉時代にかけての日本漢詩文の研究、特に歴史史料や古筆史料などに残された漢詩文史料の調査・収集を行い、これまで看過されてきた当該期の漢詩文の全体像を展望することを目指してきた。その過程で注目するに至ったのが、内閣文庫に残される林家書写の漢詩文史料や、水戸徳川家の蔵書を伝える

徳川ミュージアム所蔵の漢詩文史料である。

これらの史料を実見してみると、新出詩の発見もさることながら、校訂箇所や付箋に残るメモから、校訂や書写にあたった人々の古典研究のあり方が垣間見え、現代の和漢比較文学研究の観点からも参考となることが多いことに気が付く。特に水府明徳会所蔵史料に関しては、江戸に置かれた水戸の史館である彰考館と京都に派遣されていた史官たちとの往復書簡等、書籍の収集や書写に関する詳細な記事を含む「大日本史編纂資料」(現京都大学総合図書館蔵)が、かなりの部分残されており、周辺史料の面からもその実態に迫ることが可能である。

このような研究をめぐる背景と学界における研究の機運が背景となったことに加え、研究開始の前年、研究代表者は「詩集」に関する口頭発表(和漢比較文学学会第29回大会、2010年9月26日、信州大学)を行い、良い反応を得ていたことも研究開始の推進力となった。

2. 研究の目的

徳川ミュージアム所蔵「詩集」の研究

1「研究開始当初の背景」でも述べたとおり、徳川ミュージアム所蔵「詩集」は、「大日本史」編纂で知られる水戸藩主徳川光圀の指揮のもと編纂され、延宝9年(1681)完成後も繰り返し増補が行われた、日本漢詩の集成である。入集作者を、古代から編纂当時の物故者とし、編纂の様子を伝える「大日本史編纂記録」によれば、「諸家の(集力)の内、もし一文一詩二ても」(延宝8年(1680)12月18日付書簡・原漢文)見出せば収集したという、目録を含め全41冊にわたる大部の書である。増補作業の途中で完成が見送られたらしく、現存するものが最終稿ではないようであるが、

江戸の史館彰考館と京都在住の館員らにより、公家や寺院の所蔵史料が博搜されていること

収録された漢詩のほぼすべてについて出典注記がなされていること

史料収集の状況が「大日本史編纂記録」によってある程度追うことができ、かつそれが霊元天皇による古典書写や、加賀藩の前田綱紀の収書活動と同時代のことであり、複雑にリンクすると想定されること

等の特色を備えており、研究対象としてきわめて興味深い。しかし、同様の経緯で編纂された漢文の総集『本朝文集』が国史大系の一冊として公刊され、広く利用されているのに対し、「詩集」は未公刊であったこともあり、従来ほとんど研究はなされてこなかった。

現在所蔵者の方針により、全面的な翻刻等の公刊は難しい模様であるが、それならばこ

その一層史料の成立及び全体像について紹介してゆく必要があると考えられる。

国立公文書館蔵林家関連史料の研究

昌平坂学問所所蔵の書籍など、幕府儒官であった林家関連史料の多くは現在国立公文書館に所蔵されているが、その中にも多数日本漢詩文関係の史料を見出すことが出来、中にはこれまで未紹介のものもある。

例えば「天徳詩合」等すでに知られている四つの詩合とともに書写される「十番詩合」（函架番号 206 函 581 号 和 26130）は、鎌倉時代中期の菅原在久（1250～1288）と藤原淳範（1247～1315）の判を付し、現存例の少ない鎌倉時代の日本漢詩の作例として貴重であるが、昌平坂学問所の印を持つ現国立公文書館所蔵本と、水府明徳会所蔵本の二本しか伝わらず、学界にもほとんど知られていない資料である。本研究課題においては、広く林家関連史料全体について調査を行うことを目的とする。

最終的には、これら二つの成果を統合することにより、研究課題である近世初期における日本漢詩文研究について、その全容の解明、そして、研究対象となった中古・中世漢詩文への新たな視角の獲得を目指す。

3. 研究の方法

徳川ミュージアム所蔵「詩集」の調査・研究

公益財団法人徳川ミュージアムに所蔵される日本漢詩集成「詩集」について調査・研究を行った。

調査内容は、

「詩集」所収テキストと現在通行しているテキストとの比較

「大日本史編纂史料」等編纂に関わる史料との対応関係の精査

付箋等に見られる編集者の漢詩文研究の精査を主に行った。

また、「詩集」には、編纂の基礎となった漢詩集成「詩纂」という書があることが既に指摘されている。これについては東京大学史料編纂所に写真帳が所蔵されているので、その調査も併せて行った。

国立公文書館蔵林家関連史料の研究

2「研究の目的」でも取り上げた「十番詩合」など、国立公文書館に所蔵される林家関連の漢詩文史料について調査・研究を行い、現在のところ、すでに知られているもののほかに中古・中世漢詩文の資料として認められるものは「十番詩合」程度であることを確認した。

本資料は併せて書写されている四つの詩合が「群書類従」所収のテキストと同じ書写

奥書を有していることから、「群書類従」との関係が注目されるが、今後の課題となった。

「和漢兼作集」の注釈研究

「詩集」と同じ人物の手控えを書写したと思われる箇所があることから注目される、和漢兼作（和歌と漢詩を両方制作することが出来る人）の人物の和歌と漢詩を集成「和漢兼作集」について注釈を中心とした研究を行った。

鎌倉時代儒者の伝記的研究

「詩集」や「十番詩合」に見える鎌倉時代の儒者についてはこれまでほとんど知られることがなかったが、菅原在匡、藤原淳範、藤原俊国といった人物について、漢詩文資料だけでなく、公家日記のような歴史資料にも目配りした上で伝記的研究を行った。

4. 研究成果

3「研究の方法」に即して記述する。

と については、研究期間開始直前に起こった東日本大震災の影響と研究代表者の研究の中断により、予定していただけた調査を行うことは出来なかったが、これまでに蓄積した資料やその後行った調査を整理することができた。 については、平安漢詩の大きなジャンルである句題詩の歴史の中でその位置づけを行う口頭発表を行った（学会発表）。これは近々論文化する予定である。

については、「和漢兼作集」の春の部の注釈を中心に行った。その過程で「和漢兼作集」の和歌の撰定に当たるとされる真観との関係が重要であることが判明した。すなわち、「和漢兼作集」春の部所収の和歌と真観撰の和歌集「秋風和歌集」「万代和歌集」との撰歌傾向に近いものがあり、なおかつ真観が和歌師範として近侍した宗尊親王詠が多く入集しているのである。

その他〔雑誌論文〕は、「研究の方法」の成果の一つであり、従来ほとんど顧みられることのなかった、鎌倉時代の儒者藤原俊国の伝記と諸書の奥書をたどることにより、彼の家 藤原北家日野流における家説の伝授の様相を明らかとしたものである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

仁木夏実、儒者の家に置ける家説の伝授
広業流による天皇奉授の歴史を中心に
、高橋秀樹編『生活と文化の歴史学 4
婚姻と教育』（竹林舎）査読無、2014、
pp.350-371

〔学会発表〕（計1件）

仁木夏実、詩合小考 句題詩研究の一助
として、第1回日本漢文学総合討論パネ
ルディスカッション3「日本漢文学の基層
宗教・学問・歴史」、2015年3月23日、
大阪大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

仁木 夏実 (NIKI NATSUMI)・明石工業
高等専門学校・一般科目・准教授

研究者番号：40367925